

### <癖を考えることは、私と他者が「存在として」つながっていることを照らし出す>

人にはさまざまな癖があります。歩き方や座り方、何気ない仕草や動き、話し方、文字の書き方、問題に直面したときの解法の出し方など、数え上げればキリがありません。そんな癖について考えてみると、意外にもそこから、社会を見て取ることができます。一例として、私がフィールドワークをおこなってきたマニラのボクシングジム(それについては拙著『ローカルボクサーと貧困世界』(世界思想社)にまとめています)の練習風景を見てみましょう。



ボクサーたちは必ず共同で練習を行います。チャンピオンクラスのボクサーから入門間もない素人ボクサーまでが、同一時間に同一のフロアで、練習を行います。一同に会することによって、そこでは間接的な相互指導が果たされる仕組みが生まれます。

たとえば、ミット打ちに取り組む素人ボクサーは、隣で同じ練習に取り組むベテランボクサーが奏でる音や呼吸を体感し、それを再生しようと試みる中で、パンチを出すリズムを身につけていきます。複数のボクサーが共在することで奏でられる音やリズムを、各ボクサーが受け取ることによって、技能が獲得されるのです。

同じジムに所属するボクサーは、得意とするパンチが似てくる傾向がありますが、それもこうした練習の性質に起因します。たとえばあるジムに左のボディブローが上手なベテランがいれば、彼のフォームやリズム、間合いの取り方を若手たちも体得し、左のボディブローはそのジムの得意技として定着していきます。さらに、そのベテランがスパーリング中にグローブで髪をかき上げるしぐさをすれば、それもまた、ある種の憧れと共に、若手ボクサーたちに受け継がれていくことでしょう。このようにボクサーの身体は、個人的かつ集団的な癖が刻印されるフィールドです。さらに、個の中の集団性、あるいは集団の中の個性について、そこから考察することもできるでしょう。

癖とはこのように、個人のものでありながら、他者のものでもあり、集団のものでも、社会のものでもありえます。だから癖は、私のものでありながら、私以外のものでもあるような、そんな私と他者をつないでいるものでもあります。私と他者が「存在として」つながっていること、癖を考えることはこの点を照らし出してくれます。

現在、新型コロナウイルスによるパンデミックとそれによる混乱が生じています。この混乱は、翻って、私たちの癖を可視化させる契機でもあります。私たちが当たり前と思っている働き方や遊び方、さらに移動の仕方に制御がかけられています。普段は考える必要もないことが、今では考える対象になっています。

こうした危機は、いかに今日の社会が、問題含みであるのかを示すと同時に、それに身も心も染まりきっている私たちの癖を再考することを要求します。政策的次元での対応と同時に、私たちの癖を見なおして変えていく努力が不可欠です。

＝トイビトHPより抜粋＝

### <人物紹介>

石岡 丈昇(いしおか ともりの) 日本大学文理学部教授

1977年岡山市生まれ。2008年筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科単位取得退学。博士(学術)。貧困、暴力、差別をめぐって、フィリピン・マニラのボクシングジムやスクオッター地区での現地調査から考察している。専門は社会学。社会記述に「汗のにおい」を取り戻すための方法と実践を模索している。